

天島大輔「困ったときに助けを求められる社会を」

執筆：柳下雄太

撮影：高橋 健太郎

2022年、医療事故の結果、複数の障がいをもつ元研究者である天島大輔は参議院議員に当選した。ある種の「正常さ」という見方に支配された政治状況を変え、障がいをもつ人々の権利を守るため、天島は今も闘っている。



天島大輔参議院議員と介助者たち。

国会議事堂前にて。

2023年9月 東京

新宿、2022年7月7日午後9時。参院選の結果が次々と発表され、自民党の勝利が確実となるなか、れいわ新選組の記者会見場はお祭り騒ぎのような雰囲気包まれた。同党は2011年の福島原発事故後の闘争で有名な人物である元俳優の山本太郎氏によって3年前に設立され、今回の選挙で3議席を獲得した。代々政治家の家系に属する議員が大半を占める伝統政党が多数を占める日本の国会において、この結果は、選挙前には全国でわずか5人の当選議員しかいなかった少数政党にとればかなりの成果である。大きな社会的格差が存在する日本において—2022年の政府統計によれば、日本の労働者の1/3以上が非正規雇用である—この政党は非正規雇用者や病気を持った人など、社会的弱者の声を担おうという、日本の政治状況では珍しい姿勢で知られる。

みんなの居場所がある社会のために

大勢の記者の前で、山本は陽気な表情で天島大輔の勝利を祝福した。比例名簿の最上位の候補者であった天島は、参議院の議席を獲得したのだ。特筆すべきは、14歳のときに起きた医療事故のせいで、彼は目が見えず、歩くこと、話すことができないという障がいを抱えていることだ。24時間体制で介助され、水色のシャツを着て眼鏡をかけた40歳の新議員は、右腕の動きを通訳してくれる介助者を通じてスピーチをした。彼は「すべての人に居場所がある社会のために」働く決意をあらためて表明したのだ。「比例名簿の第一候補者としての責任を感じます」と付け加えた。「この議席を活かすために全力を尽くすつもりです」。

日本の障がい者にとって、天島はシンボルだ。「彼はとても貴重な人です。彼は私たちに希望を与えてくれますし、彼のおかげで法改正に期待することができます」と、日本の南に位置する大牟田市の市議会議員で、障がいをもつ政治家を支援する団体のメンバーである古庄和秀氏は熱っぽく語る。日本の人口の9%を障がい者が占めているにもかかわらず、国会議員は5人、地方議員は40人ほどしかいない、議員総数の0.1%にすぎない。

日本では、重複障がいをもつ人は専門の施設に入ることが一般的で、高等教育や雇用へのアクセスは極めて限られている。2018年には、すべての障がいを含めても中等教育終了後に学業を継続した生徒はわずか2%、中等教育終了後に就職した生徒の割合は30%だった。「両親は私を世界で唯一生活できる施設に入れた。50年経った今も、そこで知り合った友人たちはそこにいる」と、月刊誌『ヒューマンライツ』に書いているのは、れいわ新選組で同じく障がい者の国会議員、木村英子さん（58）だ。

天島大輔の物語を理解するには、1996年4月まで遡る必要がある。急性糖尿病にかかった天島は、医療により、約20分心肺停止状態に陥った。この事故は深刻な後遺症を残すことになる。視覚障がい、手足の麻痺、嚥下と会話の障がいである。主治医は両親に対し、彼の知能は幼児並みだと誤って告げるほどだった。ただし聴力は残っていたため、周囲の人の言うことはわかるのだが、それに反応することができないという状態に天島は陥った。「私は周りの会話を理解していることを示そうとしました。でも、体を動かさなかったので、何も伝えることができませんでした (...) パニック状態でした」と彼は自伝(※1)の中で語っている。

(※1) 天島大輔「しゃべれない生き方とはなにか」2022

ただ彼の母親だけが、彼が植物状態であることを信じようとしなかった。そこで彼女は、日本語の文字をひとつひとつ伝えることで彼とコミュニケーションをとろうと思いつく。母音と子音の組み合わせを示した表を使って、天島のジェスチャーを利用しつつ文章を作り、意思疎通を可能にする方法を考案した。この手法によって、天島は「おなかがすいた」と母親に伝えることができるようになったのである。

「事故以来、初めて他人とコミュニケーションをとることができた。ふたりともうれしくて泣きました。母に言った2番目の言葉は『ありがとう』でした」と天島は著書の中で回想している。それ以来、彼はいつも「あ、か、さ、た、な話法」と呼ばれるこの手法でコミュニケーションをとっている。彼と一緒に仕事することに慣れている介助者たちは、先回りしたり、言葉を付け加えたりして、彼の言葉を補う。

生きる希望を持てなかった

1996年12月、彼は特別支援学校に入学し、3年間を過ごした。この時期、他者とのコミュニケーションの難しさや、以前のように体を動かさないもどかしさから、自殺願望に悩まされた。入院生活を共にした友人の突然の死や、社会から切り離され、厳しいルールに支配された施設での「自由のない」生活は、彼の精神状態を悪化させるばかりだった。「生きる希望を持てなかった」と彼は自伝で振り返る。

施設を出ると、彼は実家に戻った。大学に入学する道を探そうとしたが、すぐに障がい者でない人たちによってつくられた社会の壁に突き当たった。当時、重複障がいをもつ受験生を受け入れてくれる大学はほとんどなく、高等教育を受ける機会があまりない障がいをもった学生を専門とする彼の学校の教育レベルも十分とは言いがたかったのだ。しかし、2年にわたり複数の大学から断られ続けたあと、ルーテル学院大学が入試条件を緩和することを受け入れた。そして2004年、天島は正式にルーテル学院大学の学生となる。

「学んでいる間、生きていることを実感する時間が流れます」と彼は自伝に書いている。2010年、重度の身体障がいと言語障がいをもつ人々の研究を行うため、立命館大学大学院に入学した。

博士論文を書き上げるまでの9年間で、当時、同大学で教鞭をとっていた社会学者の上野千鶴子と出会う。上野千鶴子は、日本における男女平等のための闘いの第一人者である。彼女は学生たちに「個人的なことは政治的である」というフェミニズムのスローガンを常に繰り返し、個人の経験が権力関係や政治的問題によって構成されているという事実を教えた。天島は2019年3月に博士論文を完成させるが、引き続き障がい者のコミュニケーションに関する問題に取り組む。

天島がれいわ新選組の代表、山本太郎と出会ったのは、同年におこなわれた同党の参院選候補者の一人で、同じ障がいをもつ木村英子氏の応援集会だった。山本は彼に「ヒーローの素質がある」と見抜き、2022年に予定されている次の参院選への立候補を提案した。「大きな不安」に襲われた天島は、上野千鶴子に相談した。上野千鶴子の答えは明快で、「結論から言うと、やりなさい」というものだった。彼女は、天島が常にメディアの取材に応じていることに触れながら、彼が「障がい者の代弁者になることを自らに課したのであり、この義務を果たすうえで、国会ほどふさわしい場所はない」と考えたのだ。

「私が目指しているのは、困ったときに助けを求められ、お互いに支え合える、思いやりのある社会をすることです」と天島は説明する。「私は言葉が不自由なので、この連帯は選挙で選ばれた政治家としての自分の活動のすべてにおいて目に見える形で表れています。私は仕事を通じて、すべての同僚や有権者に、助け合わなければ生きていけないということを示す義務があります。」

自分に合った人生を選ぶ

当選から1年。天島は政治家としての第一歩について尋ねられると、「国会ではしきたりが多い」と天島はため息をついた。さらにれいわ新選組は結党から時間が経っていないため、そのしきたりやノウハウを必ずしも熟知しているとは言い難い。さらに、国会の場で、天島はまたしても、障がい者ではない人たちが設計した世界のルールにぶつかっている。2019年には、木村を含むれいわ新選組の2人の障がい者候補が当選し、国会の階段やトイレのバリアフリー化は進んだものの、いまだに「すべてが健常者向けに設計されている」のだ。

天島は何よりも、日本の政策の「パターンリスティック」な側面を批判し、「無意識の差別」を嘆く。たとえば、与党自民党の西田昌司議員は、障がい者の国会議員を受け入れるために特別な配慮がなされているのにも関わらず、障がいのある国会議員が「弱者を振りかざして意見を通そう」とし、「感謝が足りない」という批判をしたのだ。

優生学にまつわる問題を特に問題視する天島は、特定の国会議員の同性愛差別にも警鐘を鳴らしている。その筆頭が自民党の議員であり、LGBTを“非生産的”であるとする文章を書いた杉田水脈である。「この発言には、植松聖の考え方と共通するものがある」と杉田議員は考える。

植松聖（※2）とは、2016年に知的障がい者福祉施設で19人が死亡、26人が負傷した殺人事件の犯人である。天島はこの事件をきっかけに、社会が「健常者の作った社会に適応できない人を見捨てようとしている」と危惧するようになった。

（※2）植松聖死刑囚は「意思表示ができない障がい者は社会のお荷物だ」という優生思想に基づきながら自己の行為を正当化した。



「あ、か、さ、た、な語法」で
コミュニケーションをとる天島大輔。
2023年9月 東京

このような日本の政治文化を変えるため、天島は現在、各政党の議席数によって決まる政府への質問時間を増やすために闘っている。障がい者が原因で、自分の意見を述べるには、他の選出議員よりも多くの時間が必要だからだ。国会の委員会では、参議院議長が天島の質問中に速記を中断する。（※3）「しかし、これは録音や録画が止められるということでもある。私の発言は国会での公式発言とみなされないということです」と天島は非難する。「健常者のルールに合わせたら、社会からきりすてられる恐怖に日々さらされている人たちの代表にはなれない。」と彼は続ける。

（※3）その後、度重なる交渉のおかげで、天島はこの取扱の廃止を獲得した。つまり参議院は通訳中の録音・録画の中止をもうしないことを受け入れた。天島はX（旧Twitter）で「発話障がいのある議員が、自分の意思疎通方法で発言する権利、一步前進です！」と喜んだ。

このような障がいにもかかわらず、天島大輔は諦めない。彼とつながる日本の障がい者は増加傾向にあり、彼らとともに天島は重度障がい者向けの介助者派遣制度の改革を求める運動を展開している。現行この制度の利用は厳しく規制されており、職業活動や教育活動への利用は認められていないため、恒常的な支援を必要とする人々の社会参加が事実上妨げられている。天島は「国は、どのような状況でも介助者の同伴を認める制度を設けるべきです」と主張する。これは重度障がい者であっても「誰もが自分に合ったキャリアや人生を選択できる」社会への第一歩となるだろう。